

## フランス語は客観的言語なのか？

### 移動表現の実験ビデオによる検証

守田 貴弘

(東京大学)

本発表の目的は、(1) ビデオ映像を用いた発話実験による、フランス語の移動表現において直示方向がいかに表現されているのかを明らかにすることと、(2) 実験結果に基づき、知覚と言語表現に関する認知言語学的な考え方を再検討することである。

まず(1)について、今までの発表者の研究では、フランス語は日本語の「入ってくる」「出ていく」に相当する複合的表現が許容されないため(\**entrer en venant*, \**sortir en allant*)、同じ動詞枠付け言語でありながら、直示動詞の使用頻度は低いとしてきた。本発表では、ビデオ映像を用いた発話実験においては、話者に近づく方向(*venitif*)と話者から離れる方向(*andatif*)については *venir* と *aller* という動詞を使わずに話者を中心とした方向性が表現されることが多いことを示し、経路や様態の違いも視野に入れた上で、どのようなタイプの直示表現が好まれるのか分析する。

(2)は(1)の結果に基づく、相対性仮説に関する試論である。直示表現をめぐっては、日本語は直示動詞の使用が義務的な場合が多く(Shibatani 2003, Uehara 2006)、主観的事態把握が好まれる主観的言語だと考えられてきた(池上 2003, 2004)。この考え方にしがたった場合、フランス語では直示動詞の使用頻度は今回の実験においても決して高くはないため、客観的な事態把握が好まれる言語ということになる。しかし、直示動詞以外の要素にも着目したとき、必ずしも事態把握の方式に違いはない。さらに、認知言語学的な考え方、すなわち、「日常言語の表現は、ミクロ・レベルからマクロ・レベルに至るどのような表現であれ、主体が外部世界を解釈していく認知プロセスの反映として規定される」(山梨 2004: 3)といった考え方を素朴に敷衍するならば、「直示動詞をあまり使用しないフランス語話者は直示方向を認識していない(認知プロセスに直示方向が反映されない)」という暴論に至ってしまうが、やはり実験結果はこのような見方を退けるものである。

言語のタイプを単文のみで判断し、そのように判断された言語タイプを直接、人間の世界認識に対応させるのは言語決定論に他ならない。本発表では、言語表現と人間の世界認識を直結させるのではなく、経験主義的認識論の立場から、知覚と言語表現の間に、「注意」という層を介在させる必要があることを提案する。つまり、知覚によって共有される外界世界は普遍的だが、ある言語を話すときに注目すべき要素があり、また、その要素を表現するための好ましい形式があるという、弱い相対性仮説(cf. Slobin 1996)が穏当であることを論じるとともに、Langacker(1990)の提唱する主体化、客体化は、「言語によって規制を受ける事態把握の方式」や「言語の主観性／客観性」ではなく、「統語上の制約」であり「好まれる表現形式」の範囲にとどまることを主張する。